

いよいよ乗船の日が来た。港に日の丸の旗がはためく。明優丸のタラップに足をかけた瞬間、これで帰れるんだと感無量であった。

船が港を離れ、周りから馬鹿野郎、馬鹿野郎と罵声が飛んだ。日本海は大荒れで、甲板の仮設便所が波にさらわれていた。舞鶴に近づいて、あの荒涼たるシベリアと比べ何と美しいことか、箱庭を見るようであったのを今でも思い出す。昭和二十二年四月二十二日、無事上陸。

⑪ 生活しなければならぬので、あらゆる商売を転々とし、三年目に本業の機業を始め、紆余曲折はあったが、ソ連生活を偲び、励みにもしてきた。

思　　い　　出

長野県　宮　下　章　人

陸軍航空廠の軍属として、昭和十三年よりハイラルで陸軍の外郭組織としての航空廠に勤務していた。昭

和十八年現役兵として孫呉の第六四二野戦防空大隊に入隊。ここで基礎教育終了後、下士官志願兵として大連教育隊に入隊、約半年間の教育を受ける。終了後、原隊復帰。本隊はサイパンに転戦し、残留部隊とともに鞍山防空大隊に転属し、防空の任務につく。昭和二十年八月九日ソ連参戦と同時に、首都防衛のため新京に転戦し、首都防空作戦の任務につく。間もなく終戦となり、公主嶺で武装解除を受ける。

やがてソ連軍の命により黒河に集結、黒龍江河畔で野宿をしながら船を待つ。そのうち、ソ連船が中国船か不明だが古びた船が来て乗船し、プラグエシチェンスクに上陸、ここから貨車に乗り、途中下車して、馬鈴薯掘りなどの作業をし、二、三日後、セミチャソフ（山林鉄道七十キロ地点と呼ばれていた）の収容所に約二百名とともに収容される。

収容所での労働は、伐採と材木の貨車積みの重労働。食糧といえば燕麦、高粱が少量。空腹と寒さで作業ははかどらない上に、ノルマが課せられる。ノルマにより食事の量も決まる。イタチごっここの繰り返しである。

栄養失調による犠牲者は四、五十名も出る。私も部下だった友の死に直面し、埋葬に参加した。零下四〇度を超す寒さ、凍りついた大地、穴を掘ろうにもなかなか掘れない。薪を焚き、凍った土を溶かしては掘る。

二十センチも掘り、ようやくその中に入れて、見えぬ程度に土をかけるころには長いシベリアの冬の夜空も白み始める。友には済まぬと思いながらいかんともしがたく、恨まずに成仏してくれよと手を合わせて帰る。いつ自分の番が回ってくるかと思えば心細くなる。

長かった冬も終わり春になるころ、パン工場もでき、少しはましな物が食べられるようになる。夏も過ぎ、二度目の冬も何とか乗り切り四月に入ったころ、東京

ダモイの話が出る。また騙されるのかと半信半疑でいたが、貨車に乗りナホトカへ着く。日本に帰れると思いい込み下車。待ち受けていたアクチーブと称する連中、「君たちは民主教育ができていない、ここで民主教育を受けないと帰さない」と言う。帰国用とは別の収容所へ入れられる。

昼は鉄道工事、夜は民主教育の日々が続く。朝くれ

る二食分のパンを一度に食べ、空の飯盒を持っていき、昼にはコンブや海藻を取ってスープで空腹を満たす。疲れて帰っても夜は民主教育、アクチーブによる講義。民主教育を終えなければ帰国できないと言われ、仕方なく受ける。

昭和二十二年の十月も終わるころ、復員船に乗りナホトカを出航。日本海に出ると嵐に見舞われ、船は木の葉のごとく揺れ、船酔いはひどく、最後の試練に遭遇しながらも、十月三十日、舞鶴に上陸することができた。

シベリア抑留記

静岡県 内田 正次

静岡県小笠郡東山口村伊達方一二九、一三五ノ合併番地で、四人兄弟の次男として生まれる。

東山口村小学校高等科卒後、静岡市葵町の中村洋服店へ奉公、昭和十二年六月から十四年二月まで。昭和